

研究主題

仲間を認め、共に成長する児童の育成

～共に挑戦し、支え合う跳び箱運動の実践を通して～

八王子市立由井第三小学校 教諭 菅原 豪

1 主題設定の理由

本学級の実態として、運動学習において児童が技能差を強く意識し、結果のみで自己評価を行う傾向が見られる。

また、特別支援学級の児童との交流が希薄で、他者の違いを尊重し、共に学ぶ関係性の形成が課題である。学習指導要領が重視する「共生」の視点に立ち、互いの立場や努力を価値付けながら学ぶ態度の育成が必要と考える。

そこで、技能差が顕在化しやすい跳び箱運動に着目し、目標の共有、相互の声掛けや補助、振り返りの工夫を通して、仲間を認め合い、支え合いながら、共に成長する学びの実現を図ろうと考え、研究主題を「仲間を認め、共に成長する児童の育成」とし、副主題を「共に挑戦し、支え合う跳び箱運動の実践を通して」とした。

2 先行研究

先行研究では、体育授業における競技志向の強さが勝利至上主義を助長し、学習の目的を成果や結果の達成に過度に限定してしまう問題が指摘されている。このような成果重視の授業観は、共通の到達目標に基づく「目的一達成一評価」を一律に適用する傾向を生み、学習過程や取組が画一化しやすくなることが明らかにされている。

その結果、技能の伸び方や努力の仕方、仲間との関わり方といった個々の児童の多様な学びの過程が十分に価値付けられなくなるという課題が指摘されている。

また、梅澤や吉野は、成果のみならず学習の過程を重視する授業の必要性を示している。さらに秋田（2012）は、安心感や居場所感といった Well-being に加え、学習対象への深い関与や没頭を示す Engagement の重要性を指摘しており、学習過程の質を高めることが児童の主体的な学びを支えることを示唆している。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では、結果や技能差のみに着目するのではなく、学習過程における目標の共有、相互の声掛けや補助、振り返りといった関わりを重視することで、児童が仲間を認め合い、共に成長する学びの在り方を検討する。

3 研究仮説

本研究では、跳び箱運動において、1単位時間を前半と後半に2部構成とし、学習過程に工夫を加えることで、児童の学びにどのような変容が生じるか検討する。

具体的には、前半において安心して運動に取り組むことができる学習環境を設定することで、児童は仲間と共に運動を楽しみながら主体的に学習に参加し、技能の向上が促されると考える。

また、後半において互いに補助し合ったり、助言し合ったりする学習活動を意図的に価値付けることで、児童は技能を高め合うだけでなく、仲間のよさや努力を認め、他者を尊重し共に学び合おうとする共生的な態度を形成すると考える。

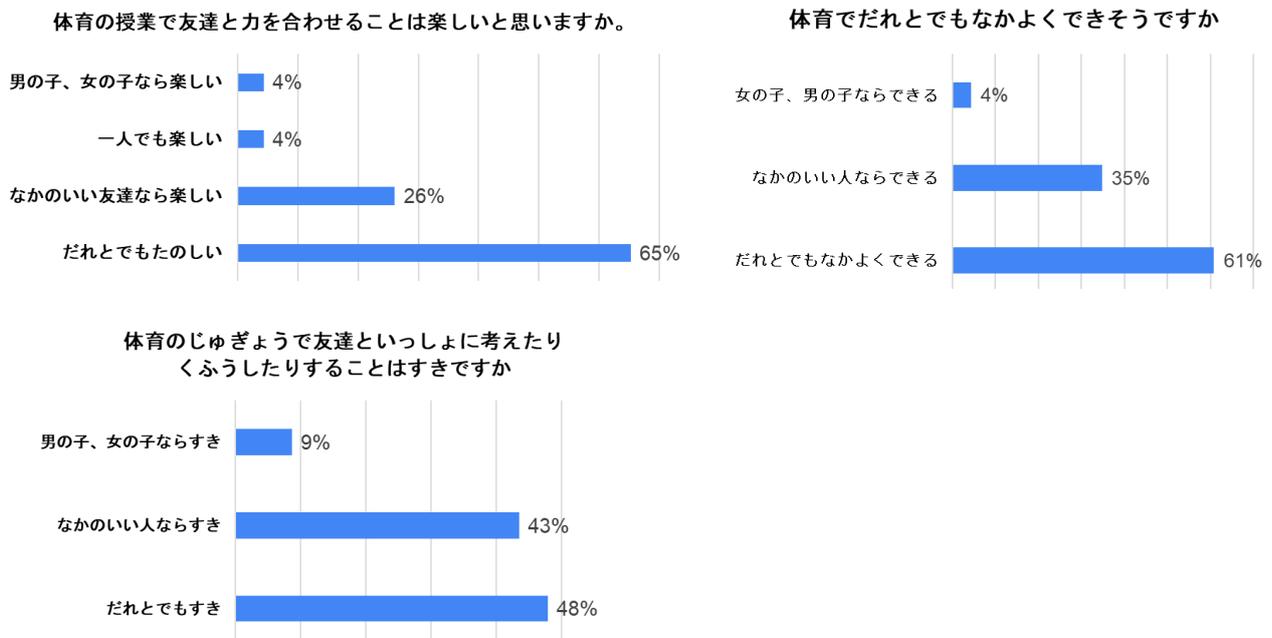
4 研究の内容と方法

(1) 調査研究①

調査時期：令和7年（2025年）9月1日

対象：第3学年2組児童23名

本調査は、児童の協働および共生に対する意識の実態を把握する目的として実施した。その結果、「誰ととでも運動できる」と回答した児童が約6割であった一方、「仲のよい人となら一緒にできる」と回答も学級の3～4割を占め、さらに同性であれば可能」と条件付きで捉える児童も見られた。これらのことから、共生の理念は一定程度理解されているものの、実際の活動場面では人間関係や、心理的距離が参加の可否に影響していると考えられる。そこで、本実践では、技能差や人間関係を考慮したペア・グループ編成を行い、「グッドパートナー」と位置付けることで、相互理解と関わりの拡大を意図的に図った。



(2) 授業研究

・安心して学習に入るための導入の工夫

本授業では、学習への心理的ハードルを下げ、児童が前向きに運動に取り組めるよう、音楽を用いた準備運動を取り入れた。一定のリズムに合わせて体を動かすことで、学級全体の雰囲気をやわらげるとともに、運動への意欲を高めることをねらいとした。

・補助運動を通じた技能理解への導入

跳び箱運動に入る前段階として、主運動につながる補助運動を位置付けた。これにより、技能のポイントを意識しながら体を動かす経験を積み、跳び箱運動への円滑な移行を図った。

・スモールステップの学習の場の設定

技能差に配慮し、難易度の異なる複数の場を設定することで、児童が自分実態に応じて学習を進められるようにした。段階的に挑戦できるスモールステップの場を用意することで、成功体験を積み重ね、安心して挑戦できる学習環境を整えた。

・グッドパートナーによる相互支援の促進

学習活動においては、あらかじめ設定した「グッドパートナー」との関わりを重視した。互いの動きを見合い、補助や助言を行うことで、技能の向上だけでなく、仲間を尊重し支え合う関係づくりを促した。

・シェアリングによる学習過程の価値付け

授業の中では、結果や技能の達成度だけでなく、一人ひとりの努力や工夫、仲間との関わりのおよさを取り上げるシェアリングの時間を設けた。個々のよさを学級全体で共有することで、共に成長する意識を高めることをねらいとした。

・ICTを活用した技能理解の深化

ICTを活用し、見本となる動きの動画を掲示することで、技能のイメージを具体的に捉えられるようにした。視覚的に情報を取り入れることで、児童が自分の動きと比較しながら学習を進め技能の改善につなげられるようにした。

（3）検証授業 令和7年（2025年）12月実施 小学校第3学年 体育科 単元名「跳び箱運動」

①検証授業の概要

本検証授業は、令和7年12月に実施した小学校第3学年体育科「跳び箱運動」を対象とし、特別な支援を要する児童を含む学級において、誰もが安心して運動に参加できる場の設定の有効性を検証することを目的とした。授業では、音楽を用いた準備運動、補助運動、技能を段階化したスモールステップの活動、友だちのよさを共有するシェアリングの場を設定するとともにICT機器により参考動画を提示し、理解や参加の困難さに応じた支援を可能とした。本時の児童の行動観察や発話の記録をもとに、参加の広がりや相互理解の変容を分析し、インクルーシブな学習環境としての有効性を検討した。

②単元指導計画

オリエンテーション	知る	知る・高める	知る・ 高める	高める	高める
1	2	3	4	5（本時）	6
1 挨拶、学習の流れを確認する。 2 準備運動をする。 3 場の準備をする。 4 主運動につながる運動をする。 ・かえるの足打ち ・舞台からとび下り ・細いマットで前転 ・ケンケンダー 5 開脚跳びのポイントを知る。 6 整理運動 7 片付け 8 振り返り 9 学習カードの使い方を知る。 10 挨拶	1 挨拶、学習の流れを確認する。 2 学習のめあてを確認する。 3 場の準備をする。 4 ポイントタイム ○開脚跳び ・踏み切り ・着手 ・着地 6 シェアリング① 7 パワーアップタイム ○自分の課題を知り、練習する。 8 整理運動をする。 9 シェアリング② 10 片付け 11 挨拶	1 挨拶・学習の流れを確認する。 2 学習のめあてを確認する。 3 準備運動（主運動につながる）をする。 4 場の準備をする。 5 ポイントタイム ○ 台上前転 開脚前転 6 シェアリング①をする。 7 パワーアップタイム ○グッドパートナーと見合い、アドバイスをし合う。 8 整理運動 9 シェアリング② 10 片付け 11 挨拶			

③本時の流れ

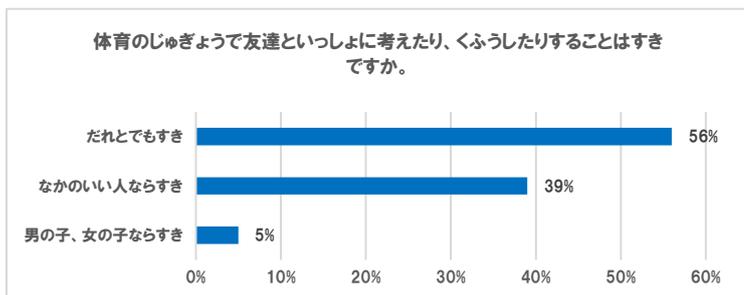
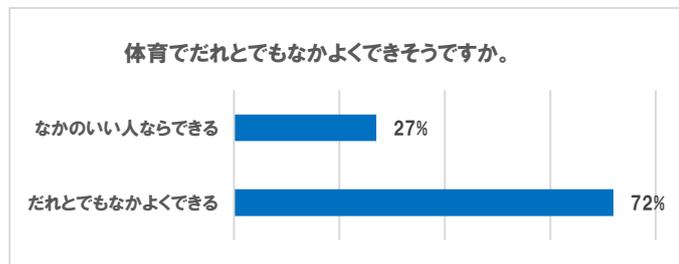
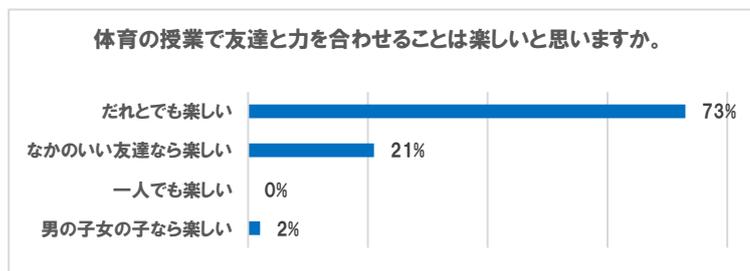
	学習内容・学習活動	●指導上の留意点 ◇評価規準（評価方法）
導 入	1、本時の学習内容を確認する。 前時の児童のよかった動きや開脚跳びや台上前転のポイント をふりかえり、めあての確認を行う。	●本時の学習の流れを確認 する。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 自分の課題を知り、開脚跳びや台上前転にちょうせんしよう。 </div> 2、準備運動（リズム体操）に取り組む。 3、補助運動に取り組む。	●感覚づくりのポイントを 意識させて運動させる。 ●安全に気を配るように声 を掛ける。
展 開	4、ポイントタイムに取り組む。 各場でポイントを意識して練習する。 5、シェアリング①を行う。 6、パワーアップタイムを行う。 7、整理運動を行う。 8、シェアリング②を行う。	◇自分の課題を意識して練 習に取り組んでいる。 ●ポイントを意識させ、運 動に取り組ませる。 ◇グッドパートナーのよい 動きを友だちに伝えている。 ●使った部位をほぐすよう 声掛けをする。 ●グッドパートナーのよい 動を積極的に学級で共有 するように促す。
ま と め	9、片付け 10、整列、挨拶をする。	●安全に協力して片付ける よう指示する。

5 結果

調査研究②

調査時期：令和7年（2025年）12月3日

対象：第3学年2組 児童23名



体育の授業において多くの児童が友だちとの活動を肯定的に捉えており、協働的な学びの有効性がグラフから示された。一方、関わる相手を限定する回答もみられ、対人関係に不安を抱く児童の存在が示唆された。そこで、意図的に設定したグッドパートナーとのかかわりは安心感を高め、参加を促進する点で有効であった。

音楽を用いた準備運動を取り入れることで、児童の情緒を安定させ、安心して取り組める状態をつくることをねらいとした。また、スモールステップによる指導を行うことで、成功体験を積み重ね、学習への意欲を高めることを意図とした。特に、特別な支援を要する児童にとっても参加しやすい学習環境となるよう配慮した。

6 考察

(1) 安心して挑戦できる学習環境を整えることで、児童の主体的な運動参加と技能の向上が促されることについて

①児童の自己評価から

児童の振り返りカードや自己評価では、「自分に合った場で何度も挑戦できた」「前よりできるようになった」といった記述が多く見られた。これらの記述から、スモールステップの場や ICT による見本提示が児童の安心感と挑戦意欲を高め、主体的な学習参加につながったと考えられる。

②授業者の自己評価から

授業を通して、技能差に配慮した場の設定により跳び箱運動に消極的であった児童も繰り返し挑戦する姿が多く見られた。一方で場の選択に迷う児童もいたことから、技能段階の示し方や声掛けについては、さらなる工夫が必要であると感じた。

③他の教員から

参観した教員からは、「児童が安心して取り組んでいる」「失敗を恐れずに挑戦する雰囲気が出ていた」という評価が得られた。

④考察

以上のことから、安心して挑戦できる学習環境の設定は、児童の主体的な参加を促し、技能向上につながる可能性が示唆された。一方で技能の伸びをより明確に捉えるための評価方法については課題が残るため、今後も継続して研究していく。

(2) 相互支援を重視した学習過程を構成することで、共生的な態度が形成されることについて

①児童の自己評価から

児童の振り返りには「友だちに教えてもらってできた」「アドバイスしてくれて嬉しかった」など仲間との関わりを肯定的に捉える記述が多く見られた。これらの記述から、グッドパートナーやシェアリングの活動が、仲間のよさを意識するきっかけになったと考えられる。

②授業者自身の評価から

相互支援を意図的に位置付けたことで、補助や助言が自然に行われる場面が増えた。一方で、今後はすべての児童が主体的に関わりをもてるような手だてや工夫が必要であると感じた。

③他教員の評価から

他教員からは「結果ではなく過程を認め合う雰囲気があった」「児童同士の関係性がよい方向に変化している」といった評価が得られた。その一方で共生的な態度の変容を継続的に捉える必要性についての助言もあった。

④考察

これらの評価を踏まえると、相互支援を重視した学習過程は、児童の共生的な態度の形成に一定の効果をもたらしたと考えられる。ただし、態度面の変容は短期間で定着するものではないため、今後も継続的に授業実践を積み重ねながら研究を深めていく必要がある。

7 成果と課題

本実践の最大の成果は、単元全体に一貫した構造をもたせ、「見通しをもって取り組める」「失敗しても受け止められる」「楽しみながら学べる」学習環境を構築できた点にある。音楽の活用、スモールステップによる課題設定、グッドパートナーとの協働は、児童心理的安全性をもたらし、活動への参加を強く後押しした。とりわけ、特別支援を要する児童が極めて意欲的に活動に参加し、友だちと関わりながら学ぶ姿が多く見られたことは、共生の視点に立った授業づくりの有効性を明確に示している。また、特定の児童のみならず、全ての児童が「楽しい」「やってみたい」という前向きな態度で学習に向かい、学級全体の学習意欲が高まった点は、本実践が包括的で普遍性のある指導であったことを示す成果である。

・音楽の活用



・スモールステップの場の設定・ICT機器の活用



・グッドパートナーとの協働



・共生的な態度の形成



一方で、課題として、こうした実践を他の単元や他学級へとどの程度一般化できるかについて、さらなる検証が必要である。また、活動場面が複数に分かれることで、指導者の目が行く届きにくくなる可能性があり、安全面への一層の配慮が求められる。今後は、構造化された単元設計の枠組みを精緻化するとともに、場の設定や見守り体制を工夫することで、共生で安心して学べる学習環境を、より持続的に汎用的なものへと発展させていくことが課題である。

8 参考文献

- (1) 梅澤秋久・苫野一徳（編）（2020）『真正の共生体育をつくる』大修館書.
- (2) 秋田喜代美（2012）『学びの心理学』放送大学教育振興会.
- (3) 西木隆（2018）「共生教育とのインクルーシブ教育」『共生学』第9号, 82－91.